恐れることはありません。　　ルカ 2:8〜14

今日は待降節第二主日で天使のキャンドル、み使いのキャンドルに灯りがともります。天使のキャンドルのテーマは「平和」です。今朝の聖書箇所の「いと高きところでは、神に栄光があるように」はラテン語で「グローリア イン　エクセルシス　デオ」となりますが讃美歌「荒野のはてに」でよく歌われていますから多くの人は、知っていますし、メロディーだけなら知らない人はいないのではないかと思います。幼い子供からおじいさん、おばあさんまでラテン語でこの部分は歌っているというわけですからすごいことですね。しかし「いと高きところでは、神に栄光があるように」は、クリスマスだけの賛美ではありません。初代教会は、「いと高きところでは神に栄光があるように、」のあとに、ことばを加えて「グロリア」、あるいは「栄光の賛歌」という賛美を作りました。

「いと高きところでは、神に栄光があるように」に続いて「地の上では、み心にかなう人々に平和があるように」とありますのは神の栄光と私たちの平和とに関連性があることを意味しています。今日は、この私たちの「平和」について学びたいと思います。

イエスの降誕の出来事の中で神の栄光の現れる時にはいつも御使いの働きが関係しています。御使いあるいは天使とは神様が私たちのところにご自身の御心とご計画を伝えるために遣わされた存在です。そして人が出会うたびに御使いから「恐れるな」という言葉が語られています。最初は、御使いが祭司ザカリヤに現れたときでした。神殿は神の家ですから、そこに御使いが現われても不思議ではなく、ザカリヤはベテランの祭司でしたから、そのことを受けとめることができたはずでした。しかし、イエスが降誕された時代には、長い間、こうした神の栄光の現れがなかったので、ザカリヤは御使いを見て、極端なぐらい驚きます。ルカ 1:12 には「これを見たザカリヤは不安を覚え、恐怖に襲われた」と記されています。神の栄光を見て「不安を覚え、恐怖に襲われた」というザカリヤの姿は、日常に慣れきって、習慣的に神を礼拝していた当時の人々の姿を表わしていると思われます。つまり神殿の儀式は、規則正しく行われてはいました。聖書も読まれていました。捧げ物もなされていました。しかし、そこには神の臨在がありませんでした。言葉では神の栄光が讃えられていても、神の栄光の現れは少しも見られなかったのです。

それは、現代の私たちも同じかもしれません。教会の礼拝は、旧約時代の神殿とその礼拝と同じく、神に出会う場ですが、今日、どれだけの人が、教会の礼拝で、神と出会い、その栄光を仰ぎ見、神の言葉の語りかけを聞くことを期待して来ているでしょうか。現代は、たとえキリスト教国であっても、人々はイベントやプログラムを楽しむため、あるいは誰かに会うために、また、そこで自分の役割を果たしたり、説教を人生に役立つ「ためになる話」として聞くために来ていると言われています。また神と出会う場所は、神殿や教会とともに、わたしたちの内面の最も奥深いところにもあります。よく「内なる宮」と言われるのがそれです。聖霊は、そこで、私たち自身の力や、この世の力を越えた、超自然の働きをしてくださるのです。皆さんも、深い黙想の中で、今まで体験したことのなかった勇気や確信、励ましや慰めを受けたことがあると思います。

もし、わたしたちが、いっさいの超自然的なこと、霊的なことを認めなかったら、不可能を可能にする神の力を受けることができません。また、自分で決めた通りに自分の人生を生きようとするなら、神がわたしたちの人生を導こうとしておられる導きを得ることができないでしょう。そしてそのまま進めば、神の栄光を仰ぎ見ることや神の臨在を感じることなく、生涯を終わってしまうことでしょう。それは、なんと、残念なことでしょうか。ザカリヤは御使いを見て恐れ、怯えました。彼の恐れの度合いは少し過剰すぎるかもしれません。しかし神の栄光さえ、無視しょうとする今日の人々に、神を恐れることの大切さ

を教えているように思います。そして、不安と恐怖におびえるザカリヤにみ使いが言ったことばは「こわがることはない」でした。

次に、御使いはマリヤに現れました。ザカリヤは御使いを見て恐れましたが、マリヤはそうではありませんでした。なぜでしょう。当時、女性は男性と同じように神殿に詣でることを許されていませんでした。神殿には「婦人の庭」というのがあって、そこから先には垣根があり、それを越えて入ることができませんでした。物理的にも神殿から遠ざけられていたのです。しかし、信仰深い女性たちは、みずからの「内なる宮」で神とまじわる生活をしていました。マリヤもそのような女性のひとりでした。ルカ 1〜2章には、マリヤが御使いの言うことを聞き「考え込んだ」「思い巡らした」あるいは「心に留めておいた」ということが三度も書かれています（ルカ 1:29、2:19、2:51)。これは、マリヤは神との静かな交わりの時を持つことを大切にした彼女の生き方を表しています。マリヤが御使いを恐れなかったのは、ふだんから、日常の中で霊的なことや天に関するものを見聞きしていたからだろうと思います。恐れはしませんでしたがじっと考え思いをめぐらしたのです。「マリヤはこのことばに、ひどくとまどって、これはいったい何のあいさつかと考え込んだ。」ルカ 1:29 とあります。御使いは、マリヤの「戸惑い」を知って、「こわがることはない」と語りかけました。マリヤは「こわがることはない」という言葉によって、神の御子、救い主の母になるという、とてつもなく大きなメッセージを受け留めることができたのです。

三度目に、御使いは羊飼いに現れました。今日の箇所です。真夜中、星の輝きより強い光が羊飼いたちを突然照らしました。この光は神の栄光の輝きでした。羊飼いたちは恐れました。しかし、ここでも御使いは「恐れることはありません」と呼びかけていますルカ 2:10。

神が人にご臨在を示し、ご栄光が顕される時の人間の正常な反応は恐れと戸惑いです。昔、ヨーロッパに行った日本の外交官が「私は何も恐れない。神さえも恐れない」と言った時にそこにいた多くの人から失笑をかったという話があります。それは勇敢でも何でもなく、むしろその人の人間性が問われることとなりました。つまり、本当に神様のご臨在、ご栄光に人間が触れた時には正常な感覚は「怖い、戸惑う、不安」なのです。

それでは「恐れ」の反対は何でしょうか？それは「平安」、「平和」です。御使いは、ザカリヤにも、マリヤにも、羊飼いにも「恐れるな」と言いましたが、それは言い換えれば、「平安があるように」ということなのです。神の栄光は、罪ある人間には、慕わしいものというよりは、恐ろしいものです。聖書には神の栄光に打たれて命を落とした人たちのことが書かれています。イザヤは、幻の中で神の栄光を見たとき、「ああ。私はもうだめだ。」イザヤ 6:5 と自ら滅びる者であるかのように叫びました。パウロは、まだ「サウロ」と呼ばれていたころ、キリストの栄光に打たれ地に倒れ、目が見えなくなってしまいました（使徒 9:3-9)。ヨハネは、「島流し」となってパトモス島にいたとき、キリストの栄光の姿を見て、死人のようになりました。ヨハネの黙示録 1:17 に「わたしはこの方を見たとき、その足もとに倒れて死者のようになった」と書かれています。

「平和」はヘブライ語で「シャローム」と言います。この言葉には、いくつかの意味があって、ひとつには「戦争のない状態」を意味します。また、「シャローム」には「繁栄」という意味もあります。イエスがお生まれになった時代、地中海世界はローマ帝国によって治められ、長い間続いた戦争が終わり、平和な時代となりました。人々はこれを「ローマの平和」と呼んで、それを楽しみましたが、ユダヤの人々には、それは、屈辱以外の何者でもありませんでした。ユダヤの人々が願った「平和」は、ユダヤの国が独立して、ソロモンの時代のような繁栄を取り戻すことでした。そして、そのことを「救い主」に期待し

たのです。

しかし、神が「救い主」を通して与えようとされた「平和」は、そうしたものではありません。それは「内面の平和」でした。日本語では「平安」と訳されます。聖書の「平安」は、神との関係を問題にします。聖なる神と罪ある人間には相いれないものがあります。罪には、人間に勝ち目があるはずがありませんから、そこには滅びしかありません。しかし、神のほうから和解を申し出てくださって、その和解の条件のすべてを神が満たしてくださったとしたら、どうでしょうか。わたしたちにはただ神に降伏して、従順を誓うだけです。

ローマ 5 章は「ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。」ローマ 5:1 という言葉で始まっています。聖書が教える「平和」、「平安」は、主イエス・キリストがくださるもので、わたしたちを神との正しい関係に置くものです。信仰と聖霊に満たされていた初代のクリスチャンは、この「主の平安」を日々に体験していましたので、礼拝の中でその「平安」を口にせずにはおれなかったのだろうと思います。この平安は、今も、イエス・キリストを信じ罪赦された者に宿ります。求める者すべてに与えられます。わたしたちは、「主の平安」によって神に近づき、恐れなく神の栄光を賛美し、神に仕えることができるのです。

これが、御使いが羊飼いに「恐れるな」と呼びかけ、「地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように。」と賛美した、その「平和」です。この「平和」は「御心にかなう人々に」与えられると言われていますが、「御心にかなう人々」とは、どんな人のことでしょうか。それは、特別に立派な人々のことでしょうか。いいえ、むしろ、それは自分の罪を知る人々です。自分の罪を知り、神の臨在を求めるなら不安や恐れが起こることは当然のことです。神はそれに対して「恐れなくて良い」と言ってくださいます。このクリスマス、この「平和」、「平安」を受けて、人を救ってくださる神の栄光をほめたたえたいと思います。